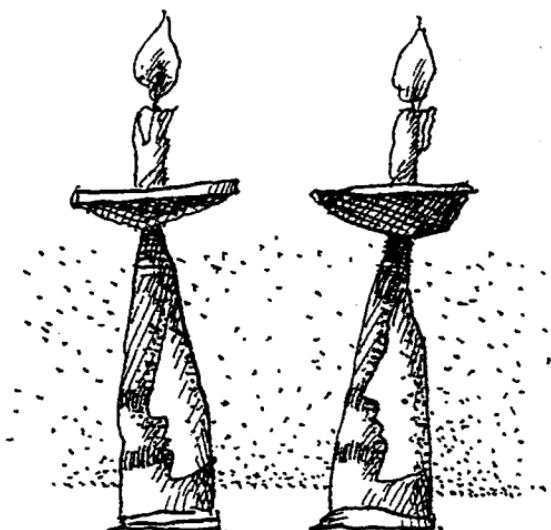


ROTARY

Q & A

付・職業倫理の源流…日米比較



Y.F.

ロータリーの綱領

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある：

- 第1 奉仕の機会として知り合いを広めること；
- 第2 事業および専門職務の道徳的水準を高めること；あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること；そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること；
- 第3 ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；
- 第4 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

— 四つのテスト —

言行はこれらに照らしてから

1. 真実か、どうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるか どうか

序

市原ロータリー・クラブ

会長 小池清二

一〇〇〇年から二〇〇一年度の会長に仰せつかりました。会務の一番の懸案は、近年、ロータリーの会員数の減少を来しておることです。その原因には、経済の不況、低迷とロータリーの理解不足があると言われています。経済不況・低迷に対しては、それこそロータリー精神に則った職業奉仕に徹することだと思います。

しかし、ロータリーの理解ということは、約百年前のロータリーの発足から今日までの先人が思考し、実践を通して得たロータリー哲学、職業倫理、ロータリーの運営方法等をよく理解しておかないと、毎週出席を義務づけられている例会に、何のために参加しているのか、目的意識の欠如により、次第にその意欲が薄れてしまい、退会の羽目になりかねないと思われます。

ロータリーを理解するには、例会や各種研究会に出席して、諸先輩より自分から

質問し回答を得る方法と関係書物から自習するしかありません。

関係書物については、ロータリーの役員任期が一年制の為か、本格的に研究し、系統立てて著作する人が少なく、また、ロータリー図書館が身近にないことから、なかなか手にすることができない現状です。先輩からお借りして学習することが多くなります。

このような状況下で、この度、常泉会員が現情報委員の立場から、自分の経験を生かし永い教職に就いておられたことから、自分の知り得た知識を人に教えるという奉仕の気持ちをもって、我々後輩に理解して頂きたい点について、わかり易く、問答形式の冊子を発刊して頂けることになりました。我がクラブの齊藤パスト・ガバナーの「ロータリーのしおり」と共にご愛読を賜り、ロータリーのご理解を更に深め、クラブライフを楽しんで頂きたく存じます。

最後に、常泉会員の著作のご苦労に、クラブを代表して感謝申し上げます。益々ご健勝にてご活躍されますようご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

改訂再版を祝す

市原ロータリー・クラブ

(一〇〇三～一〇〇四年) 会長 加藤 庄司

常泉会員がロータリー情報委員長の職にあった時、会員の実践上の悩みに答える形式で自らの体験に基づいて、多くの示唆に富んだ本誌初版を刊行されました。

今回は、職業奉仕委員長の課題を果たしたいということで初版に補稿しての再版です。補稿の部分は先人が取り組んでいなかつた国際ロータリー発足以前の職業倫理理念の日米比較という壮大な研究になってています。近年、ロータリアンでありますがら、アメリカ生まれのためか、今いち理念がよくわからないという声が聞かれます。よく言う食わず嫌いの部分も否定できませんが、この疑問に対しても明解な解説を開してお大変な労作であります。

会員を代表して心からの謝意を表します。

発刊に当たり

会長を経験した後、情報委員として三年目に入りました。

後輩のために何かお役に立つことはないかと考えた結果が、この小冊子の発行です。しかし、本クラブには、齊藤パスト・ガバナーの大作があり、私はその影響のもとに育ってきたようなもので、いまさらとも考えたのですが、私自身の勉強のつもりで思いきって挑戦してみました。

読者にわかりやすくするために問答形式をとり、資料は、クラブ生活八年有余の間、疑問を感じたり、ロータリーの核心に触れた著作や講演に出会った時に書きとめておいたものを活用しました。

従つて、ここで取り上げた問答も、理念や実践の背景になるものが中心になっていることをご了承下さい。

極力、私の体験に基づいて感じたことを折りませながら解説を試みました。

一問一答形式のため、重複する箇所が多くなりましたが、繰り返すことにより理解を深めることができるのではないかと考え、あえて、そのままにしました。

ロータリーについては、いまだ学習半ばのため、適切な解説を欠いている箇所も多いと思いますがご寛容下さい。

私と同じように疑問を持ちながら、経験を積んでいくであろう後輩の方々に、若干なりともお役に立てれば幸いと思っています。

1100 1年1月1日

改訂再版に当たつて

初版は出版を急いだため若干の書き残しがあり、機会があれば改訂版に補稿したいと考えていました。

幸いに、本年度、市原ロータリー・クラブは創立四〇周年を迎えます。それに職業奉仕委員長の依頼を受けたのを期に、改訂再版することにしました。

補稿の研究対象は、国際ロータリー発足の一九〇五年以前の日本とアメリカの職業倫理運動の歴史的比較の試みです。

入会以来一〇年を経た一人のロータリアンの心の軌跡としてとらえていただければ幸いです。

一〇〇三年七月一日

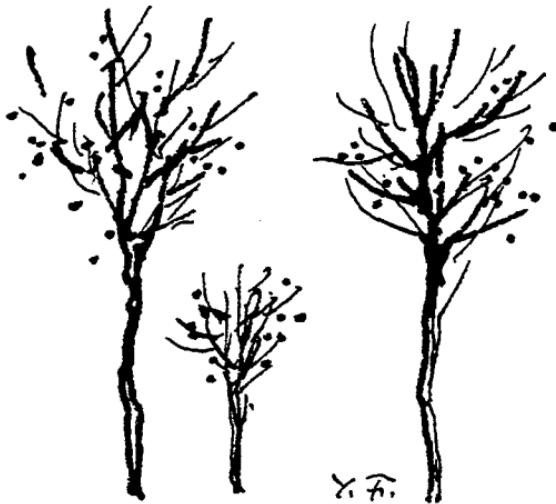
市原ロータリー・クラブ

常 泉 健 一

ロータリー

Q
&
A

目次



第一章 ロータリーの理念

ロータリーの目標	5
ロータリー誕生の背景	7
草創期の先人達の取り組み	11
奉仕について	13
ロータリーの二大標語とは	18
職業奉仕の意味	21
ジャン・カルヴィンとマックス・ヴェーバー	24
団体奉仕か個人奉仕か	28
日本史における職業倫理運動	32
職業倫理理念の源流・日米比較	34
日本で初めて職業倫理を説いた鈴木正三	41
明治時代初期国民道徳確立の必要を説いた西村茂樹	49

ベンジャミン・フランクリンの職業観 ······

鈴木正三・石田梅岩・西村茂樹・ベンジャミン・フランクリンを生んだ時代 ······

61

57

第二章 ロータリーの実践 ······

ロータリーにおけるクラブ・サービスとは ······

委員会活動の目指すところ ······

ロータリーにおける親睦の意味 ······

クラブ内の不協和音をどう考えるか ······

ロータリーで哲学や歴史を語ることの意味 ······

職業奉仕と社会奉仕のメルクマールは ······

社会奉仕活動の意味と事例 ······

自由経済万能でよいのか ······

魅力のあるロータリー・クラブとは ······

100

96

94

91

88

85

82

79

77

75

・参考資料

- (1) 「マックス・ウェバーの経済倫理」
- (2) 「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」
- (3) 「奉仕の実践に関する決議」 23～34号6項 社会奉仕準則・要訳
- (4) 「ロータリー精神」 ロータリー通解より
- (5) 「切替家の家訓」

あとがき

第1章

ロータリーの理念

「不断の自己研鑽によって奉仕の心を会得して、これを社会に適応していくためにロータリー運動がある」

フレデリック・シェルドン



ロータリー・クラブは何を目的としている集団ですか。

ロータリー運動は、一口にいって、人生を如何に生きるべきかを問い合わせ続ける専門職業にたずさわる者又は企業経営者の生涯学習の場です。

会員は一業種一会員を原則として週一回の例会をもっています。この運動の目標とするところは、会員相互の交流を通じて自己啓発を図り、道徳水準を高め、その心をもって自らの職業を通して社会に貢献することを目指している倫理運動です。まず、別掲の綱領をご覧下さい。

第一は、会員相互の交流により親睦を深めること

第二は、各自の道徳水準を高めることであり、そして第三、第四は、ロータリアンのすべてが個人生活、事業生活や社会生活においてクラブ活動で体得した奉仕の理想（職業倫理）を実践することを期待しています。

さらに、平素の行動基準として四つのテスト（自己評価の観点）を示し自己抑制を求めていきます。

この四つのテストについては、佐藤千壽パストガバナーが含蓄のある解説をしています。長くなりますが紹介しておきます。

「四つのテスト」は、その前書に「言行はこれに照らしてから」とありますが、英語の原文では “Of the things we think, say or do” となっています。お気付きのように、原文は言行だけでなく、その前に “think” があるのです。つまり「四つのテスト」に反するようなことは考えてもいけないのです。ということは、その人の思考の構造そのものが常時、「四つのテスト」の枠組の中にあるということになります。これは重大なことです。「四つのテスト」は、要するに

- 軽率な発言をするな

- ・いい加減なことを言うな

- ・軽挙妄動するな

- ・自分の損得を棚上げして、相手のことを先に考えよ

ということですが、思考の構造という所まで遡って突きつめて行くと、それはもうその人の性格一厳しく言えば人格の問題になってしまいます。従って、ロータリーは、人格鍛成・人づくりから出発する、という結論に達するのです。日本ロータリーの始祖米山さんが「ロータリーは人生道場である。」と言われた所以です。

ロータリー運動は、先人のたゆみない努力の継続によって、人類文化史上二十世纪の時代に最もすぐれた職業人の倫理運動になったといわれています。

次に示すように、現在、世界各国にクラブがあり、様々な奉仕活動に取りこんでいます。

・世界のクラブ数と会員数

一六三か国 (一〇〇一年六月)

クラブ数及び会員数 三〇、一四九クラブ

一、一八八、四九二人 (一〇〇一年六月三十日現在R.I.公式発表)

・日本のロータリー

クラブ数 二、三八九

会員数 一一一、一一四人 (一〇〇一年十一月)

ロータリー誕生の背景を知りたい。

すでに先輩ロータリアンにより、いろいろ紹介されています。その中で私が一番印象に残ったのは、十六年前に銚子で行われた地区大会の佐藤千壽パスト・ガバナーによる講演記録でした。ポール・ハリスの自伝を引用して次のように述べています。

「一九〇五年（明38）ポール・ハリス、ロータリー・クラブを創立、当時のシカゴは地獄もかくやと思われる程の慘憺たる暗黒の世界でした。世の中もこれ以上悪くなりようがないという悪徳の極で、金儲けのためなら人殺しも朝飯前で不法侵入・不払い・計画倒産・夜逃げ・およそ考えられる限りの悪知恵競争を繰り展げていました。こういう無秩序な腐敗した実業社会を規制する商業会議のような組織もありません。後年ロータリーで採用されたService above selfとは全く反対の Self preservation First. 自衛第一が当時のシカゴに生活する者の一番大事な心構えだつ

た。」と、ハリスは自伝で書いています。

こういう状態の中で、シカゴ・ロータリー・クラブが生まれました。殊に新人のよそ者で身寄りのないポール・ハリスは友人として信頼して取引のできる仲間というものを誰よりも切実に求めていたはずです。

三人の友人と語らって二月二十三日第一回の会合を開いたのがロータリー・クラブの誕生でした。一九〇七年、ハリス会長となり一九〇八年、ロータリーの骨格形成に重要な役割を果たした二人の人物を会員に迎えている。ハリスは、当時を回顧しています。「ロータリーが発足して間もない頃の一夜、天の加護を得たといふか、この運動に不滅の足跡を残した二人の人物がシカゴのクラブに入会した。即ち、アーサー・シェルドンとチエスレイ・ペリーである。」

ロータリーの理念の骨格を作ったのがこのシェルドンであったのです。このことについては、後に詳細に触れます。

ロータリーを知るためには、先ず、草創期の歴史を学ぶことだ、と、先輩ロータリアンから教えられましたか。

その通りだと思います。私の体験からお話ししましょう。

入会後数年は、自分の仕事の多忙さと担当したロータリーの役職を消化することで精一杯でした。落ちついてロータリー運動について理解しようとするゆとりがなかつたように思います。それでも毎年行われる地区の研修会には欠かさず参加していました。その中でロータリー誕生後の運動方針樹立の背景に興味を持ち始めました。特に地区職業奉仕委員会における内外の著名なリーダーの講演やパネルディスカッション等におおいに刺激を受けました。

話の中で、ルター、カルヴィン、ヴェバー等のヨーロッパの著名な思想家や神学者の思想が紹介され、知的興奮をかきたてられたものでした。おかげで入会以来、

理解が深まらないで、もやもやしていた職業奉仕活動の意図していることが見えてきたのです。職業奉仕の理解が進むことにより、ロータリーの意図する運動の全容が把握できるようになりました。

更には、創始者ポール・ハ里斯とそのよきパートナーとして大きな役割を果したフレデリック・シェルドンを通し、草創期のロータリーの理念や、行動基準作成の創造的取り組みの歴史に接することができたのです。

先輩ロータリアンは、次のようにいっています。

「ロータリーが、ロータリーであるという所以は、道徳的な原理を一層強固にして、普遍的なものに拡充した。草創期から約二十数年にわたって真摯な取り組みをしてきた先人達の努力を我々は再確認すべきではないか。」

一九〇七（明40）われ等小数の職業人の親睦のエネルギーを挙げて、世のため、
人のために放流しようと宣言

一九一〇（明43）全米ロータリー・クラブ連合会を結成。ポール・ハリス初代連
合会会长

一九一一（明44）第二回全米ロータリー・クラブ連合会のポートランド大会にお
いて、アーサー・シェルドンによる「最もよく奉仕するもの、
最も多く報じられる He Profits Most Who Serves Best」及
びフランク・コリンズによる、「超我の奉仕Service,Not Self」
が、発表された。共に非公式ながらロータリーのモットーとな
る

一九一二（大元）国際ロータリー・クラブ連合会と改称。初代会長グレンC・ミー
ド就任

一九一五（大4）「全分野の職業人を対象とするロータリーの倫理訓」全十一か

条、サンフランシスコ国際大会で議決

一九二〇（大9）東京ロータリー・クラブ誕生

一九二一（大10）フレデリック・シェルドン（Frederik Sheldon）Philosophy
of Rotary 「ロータリーの哲学」を国際大会で発表

一九二二（大11）国際ロータリーとなる

一九二三（大12）「奉仕の実践に関する決議」23～34号をミズリーリー州セントルイ

ス国際大会で採決

一九二七（昭2）奉仕の四分類を提唱

クラブ・職業・社会・国際

国際ロータリー理事会で決議

* 一九二三年の奉仕の実践に関する決議については、クラブ計画書に掲載してあります。

ぜひ、ご一読をお勧めします。

・一九一五年、サンフランシスコ国際大会における決議「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓、全十一か条」（別添巻末参照）については、私の個人的見解ではありますが、今読んでも色あせておりませんし、歴史的に価値あるものです。草創時の先人の努力を評価し、古典として座右におかれたらいいかがでしょ
うか。

一般に奉仕といえば他の者に対する善意や思いやり、弱者に対する慈善行為と考えられています。

ロータリーでいう「奉仕」の意味は違うといわれていますが。

私もロータリーに入会してしばらくの間、このことの意味が理解できなかつた経験があります。諸先輩の著書や講演集録を読みあさつて漸く納得したものです。

ロータリーの草創期、創始者、ポール・ハリスの片腕として、ロータリーの理念構築に大きな役割を果したフレデリック・シェルドンの奉仕の哲学に触れ、霧の晴れた思いがしたものです。

※ 「奉仕」について、シェルドンはこういっています。

「利己」と利他の調和せしむる心の場」であると。

言い換えますと自己中心的になりがちな心と、相手の立場になって考えることのできる相反する心を調和させる心の場ということになります。

これが商人と顧客との関係を律する重要な原則であるとし、不斷の自己研鑽によつて、この奉仕の心を会得して、これを社会に適応していくために、ロータリー運動があると説いたのです。ここでいう「奉仕」は心の修練の場を意味しているのです。

※一九二一年、スコットランドのエジンバラで国際ロータリー・クラブ連合会十回大会でフレデリック・シェルドンは、(Philosophy of Rotary) 「ロータリーの哲学」を体系的に発表しています。

この考え方は、一九二三年のセントルイス国際大会で採択され、決議23～34号の一項に実を結ぶことになります。

この一項には次のように記されています。「ロータリーは、基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情のあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。」

※・フレデリック・シェルドンは、ポール・ハリスのシカゴロータリー・クラブに入会し、母校シカゴ大学経済学部が開発した「奉仕の概念」を、ロータリーの理念に導入したことで知られています。

・チエスリー・R・ペリーは初期のロータリーにおいて、その連合体の形式に大いに貢献し「ロータリーの施工者」と呼ばれています。国際ロータリー初代事務総長。

ロータリーの「大標語」は。

ロータリーの「大標語」と云われて居るものには、
「超我の奉仕」である。

その「」は、「最も多く奉仕する者、最も多く報われる」である。

その「」は、一九一〇年創立の「ネアポリスロータリー・クラブ初代会長ペンジャ
ミン・フランク・コリンズが「Service, Not Self」提唱後はService Above Self
と改めました。

その「」は、一九〇八年シカゴロータリー・クラブに入会したアーサー・フレデリック
ク・シャルムンが「He Profits Most who serves Best」も提唱しました。共に
一九一一年の全米ロータリー・クラブ連合会の第一回大会で発表され、ロー
タリーの理想を効果的に表現したものとして、ロータリアンの心にはいきり印象づ

けられました。その後、一九五〇年のデトロイト大会で正式にロー・タリー標語として採択されました。

「Service, Not Self」は、超我の奉仕と訳されていますが、自分を犠牲にして他人に尽せという意味のように解釈されるかもしれません、そうではなくて、人間の本能ともいえる自分の利益だけに没頭することもなく、自分の正当な利益だけを受け、先ず奉仕せよという意味なのです。

「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」は、成功する商売の道は奉仕することにかかっている。どんな取引でも買手と売手双方に利益するものでなくてはならないという理論から出たものです。

この二大標語は、クラブの認証状をご覧下さい。上段のロー・タリー・マークの左右に示されています。

なお、この二大標語の理念は、決議「23～34」の第一段に「ロー・タリーは、基本的には、一つの人生哲学であり…略…この哲学は奉仕＝「超我の奉仕」＝の哲学

であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」という実践倫理の原理に基くものである」とうたわれています。

* ハーリングスが語った「Service, Not Self」は、奉仕の内容として自己滅却を説くロータリーは、実業の世界で利潤獲得のため悪戦苦闘しております一般ロータリーアンに、実際に適用できるかという疑問が出てきました。シカゴクラブ会員は討論の末、自分自身を二の次にしておくれのはよいとしても、自分を完全に否定したのでは奉仕にならないのではないか「も」、それなら“Service Above Self”にしては「どうだらうか」「さればよいね。すぐ力を貸さぬといふや「Service, Not Self」は「Service Above Self」に変わつた。世に「だ」〇母頭のノミドリす。

職業奉仕の意味がわかりにくい、むずかしいといわれています。
わかり易く説明して下さい。

ポール・ハリスとその友人達により相互扶助を目的とした結社が次第に有力な会員の加入により、職業倫理の高揚を目指した倫理集団に成長した経緯は、すでに別稿で紹介したように一九〇五年～一九三〇年頃までのロータリーの世界大会における各種決議でおわかりでしょう。

そこで一貫して目指したことは、理念の構築とこの理念をいかなる方法で行動に移すかという実践倫理の行動基準を開発することになりました。

この草創期の二十数年の中にご質問の答えが示されていると思っていています。再度、確認しましょう。

シェルドンのいう奉仕の哲学 (Philosophy of Rotary) を、体得する修練の場

がロータリーの主とした活動なのです。そこで培養された奉仕の心（日本流にいえば徳といつてもよいでしょう）をもって職業生活の場で実践に移すこと、自己研鑽しながら職業生活に適用する、この活動が職業奉仕なのです。

職業奉仕については、中堅ロータリアンあたりからもこんな話をよく聞きます。

「経営者、事業主なら職業奉仕はあたりまえ、みんなやっていますよ。そう熱心になることもないでしょう。」この人は、ロータリーの職業奉仕の意味をよくわからないまいっているのかもしれません。

ロータリーは、会員相互の交流の中で徳（奉仕の心）を積み続けることを期待しているのです。私は七十歳を越えていますが、まだまだ皆さんに学ぶことが多いと思っています。人格の修練は生涯の課題と考えているからです。ですから毎週の例会への出席が楽しいのです。

職業奉仕についての事例を一つ紹介しましょう。

埼玉新都心駅近くの橋上公園の地下の外資系と思われるコーヒーショップでの光景です。

主婦と思われる中年女性の三人のグループが来店、セルフサービスのため、それぞれ小さい盆に、コーヒーと菓子をのせ、テーブルに移動、その際、一人の女性がつまずいてコーヒーを床に落してしまったのです。紙コップはこわれないけれど空になりました。つれの二人の女性達は空になったカップに自分たちのコーヒーを分け注いでいました。その様子を見た店長らしき若い社員は、とつさの判断でしょ、代りのコーヒーを用意し、丁寧に詫びながら接したのです。女性客は「ありがとうございます。私の不注意なのに」と恐縮するばかり。店長は「どうぞ、ご遠慮なく」とさりげない態度で床を拭きとっているのです。（この店では、コーヒー一杯目のサービスはないということ）

近来にはいすがすがしい若い店長の接客態度に感じ、帰り際に一声かけずにはいられませんでした。

うまいコーヒー、安いコーヒーを売ることは競争時代のこと、当然のことですが、店長由い心のこもった利を省いたさりげない接客態度に、まさにロータリーで大切なService Above Selfのものと感じたのです。

※「田」を抑制し、相手を思いやる心の修練の場」 シュルトンの奉仕の哲学

※「職業奉仕」については、地区職業奉仕研修会が、一九九六年度から毎年、地区内外の著名なロータリアンによる講演やシンポジュームを開催し、その記録が残されています。大へん参考になります。

ジャン・カルヴァインとマックス・ヴェバーがロータリーの実践哲学と密接な関連があるといわれていますが。

ジャン・カルヴァイン Jean Calvin は、仏の神学者で宗教改革者（一五〇九～一五六四）（室町・後期）として知られています。マルチン・ルターに続いて、ローマ法皇の専制的支配に反対、宗教改革運動の中心的役割を果したと言われています。カルヴァインは、^{*}職業は神によって与えられたもの。従って、仕事をもてることに感謝しなければならない。そのためには日常の職業労働の中において人間的弱さのあらわれである諸々の衝動、欲求、雜念を断ち切つて、己の仕事に専念する自己抑制の必要を説いたのです。

イスのジュネーブを拠点にして起ったこの教義は、その後、伝統宗教のカトリックの專制に反対する大きな流れとなり、ヨーロッパ全土に波及していくことになり

ます。いわゆる宗教革命です。

カルヴィニストは、信仰の自由を求めて、アメリカ大陸にわたり、アメリカのプロテスrant教会の母胎となつたといわれています。

このカルヴィンの教義、即ちプロテスタンチズムの職業倫理は、ロータリーの草創期のロータリー運動の職業倫理（哲学）樹立の背景になつたといわれています。当時、アメリカ市民社会を支えていた知識層の大部分は、プロテスrantであったといわれており、数百に及ぶアメリカ社会にある様々な結社の中で職業倫理を運動の中心に据えたロータリー運動は、当時のアメリカ社会にとって干天の慈雨としてとらえられていたであろうことは想像に難くないことです。

マックス・ヴェバー（Max Weber）（一八六四～一九二〇）（明治・大正）は、独の社会学者。カール・マルクスと並ぶヨーロッパの卓越した思想家として知られています。一九〇四年（明37）に発表した「^{*}プロテスタンチズムの倫理と資本主

義の精神」は、不朽の名著として現在なお広く読まれています。私もヴェバーの虜になつてゐる一人です。ヴェバーは、この論文で世界の五大宗教、儒教、ヒンドゥ教、仏教、キリスト教、イスラム教（回教）を克明に比較研究し、カルヴァイニズムの倫理のみが、即ち、厳しい禁欲的職業労働により職業に専念することを教義とする考え方が労働に携わる者の心を制御し、ヨーロッパを中心に興つた近代資本主義の発展の背景になつたと論破したのです。当時の思想界に大きな反響を呼んだことで広く知られています。

ヴェバーが「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」を発表したのが一九〇四年、ポール・ハリスがロー・タリーを結成したのが一九〇五年、「全分野の職業人を対象とするロー・タリー倫理訓」を国際大会で議決したのが、一九一五年。

プロテスタントと思われるロー・タリー草創期の先人達が取りくんだ実践倫理基準樹立のための背景に、カルヴァインの職業専念の教義やヴェバーの著作が大きな影響を与えたといわれている所以です。

- *
• 本来「職業」は、英語でoccupationと訳します。しかし、西欧ではVocation
が主流です。その意は「神のお召し」であり、「天職」「使命」になっていきます。
• ロータリーでは、Vocational Service職業奉仕と云ふ言葉が使われています。
• ドイツ語Beruf,の意は「召命」「呼びかけ」であり、西欧社会では職業を意味
する言葉として使われにあたるとの意味は深いのです。

ロータリーは団体奉仕を中心とする団体ではない。
その由来とするところは個人奉仕であるといわれていますが。

ロータリーは、団体奉仕を全くしないということではありません。しかし、その主とする活動は既に度々触れているように会員相互の交流を通して学び合い、より高い道徳観を得て、その心を先ず自分の職業活動に活かすことにより社会に貢献することを目標としているのです。ロータリー論議でよく話題になるアイサーブ（We Serve） ウィサーブ（We Serve） のじゅうかと問われれば迷うことなく、アイサーブなのです。

あくまで基本は、自己啓発活動と個人による奉仕の実践です。ロータリーという団体が奉仕するのではないのです。近年、国際ロータリー等が団体奉仕の傾向が強くなっているという批判の声も挙がっていますが、われわれはロータリーが目指す

原点を忘れては、ロー・タリーの存在意義はなくなると心得ておくべきでしょう。ロー・タリーが単なる寄付団体、或いは慈善団体であれば、これほど巨大になつてゐるはずはないと思うのです。

ロータリーで言つ「職業倫理」については、歴史を追つてみれば、ジャン・カルヴィン、マックス・ヴェバー、フレデリック・シェルドン等の哲学者や社会学者は、さけて通れない人物であることはよく理解できました。

ところで日本では、歴史的にみてこのような職業倫理にかかわる動きは全くなかつたのでしょうか。

よく質問して下さいました。私も同じようなことを考えていた時期がありました。

友人の千葉大学法経学部の中原教授に相談したところ、専門ではないのでと言ひながらも関係した大部の資料が届けられたのです。その中に私が最も知りたかった論文があったのです。江戸時代中期に心学運動を開拓した「石田梅岩」の思想です。私にとっては恥しいことに初めての出会いでした。

次に、その要旨を紹介しましょう。

石田梅岩（一六八五～一七四四）江戸中期

心学運動を一七二九年に展開した。「石門心学」といわれている。

梅岩は、丁稚奉公、手代として商家に仕えた後、四十四才で心学・布教の講義を京都で始めた。マネジメントに関する講義は世界で初めてであり、経営教育史の観点から高く評価されている。彼の思想の根本は神道であったが儒教と直結していた。その経営哲学は商業の意義と商人の生き方の追求であった。

彼は、身分制最下層の商人に、自尊心と確信を植え付け、正々堂々、真面目に自己の職業の専念を呼びかけ、又、利潤の追求を肯定し、倫理的正当性を与えた。この梅岩の職業倫理や利潤観は、ヴェバーの「近代資本主義の精神」と類似している。彼が強調した徳目は、恩・礼義・忠誠・服従・正直・勤勉・儉約等の儒教思想に連なるものである。（京都産業大学、渡辺喜七教授）

同様に堺屋太一の著書「日本を創った12人」でも、石田梅岩について「勤勉と儉約」の庶民哲学者として、一〇〇〇年紀の中の偉大な人物として、挙げていますので、その一部を紹介しておきましょう。

石田梅岩は「石門心学」の始祖。「石門心学」とは、「石田派の心の学」の意味だ。現在さほど知られていないがその門流の講釈所「心学塾」は、江戸時代の後半から明治初期まで全国にあり、大きな勢力を持った精神修養団体だった。もちろん武士や大名も参加したが、石門心学の説く清廉で勤勉な精神は、圧倒的に庶民の中に広まり、「勤勉と儉約」という町人哲学を生みだした。

この石門心学のもたらした庶民の哲学は、今日の日本人の美意識、倫理観、生活様式や人間評価に深い影響を与えており、この国独特の勤労観を決定づけている。石門心学を創唱した石田梅岩は、現代日本を創った人物として欠くことのできない一人なのだ。

さすがのヴェバーも、西欧に比較して、全くひけをとらない精神文化が日本にもあつたことを見落していたのでしょう。

もちろんヴェバーのみならず、日本に対する世界の認識は極めて幼稚であったようだ。ロータリー創始以前一八九九年（明32）新渡戸稻造は、このような事態を憂え、英文で「武士道」を発刊し、日本道徳の価値を広く世界に宣揚したことはよく知られているところです。

発刊以来、三六か国に翻訳され、版を重ね、現在でも広く読まれています。「武士道」については、梅岩の職業倫理とは若干、違和感をもたれる方もあるうと思いますが、日本人の生き方（倫理）としては、共通のものがあると考えて、あえてここで取り上げました。

最近発刊された一橋大学大学院荒井一博教授による「文化の経済学」に、新渡戸稻造著「武士道」を引用、次のように述べています。

この著書に描かれている武士道の考え方とは、今日でも多くの日本人の琴線にふれ

るであろう。武士道は、裏取引や不正な行為をひどく忌み嫌つた。嘘をつくことやごまかしは臆病とみなした。至誠を第一に考え、私を殺して万機に接することを理想とした。金銭に執着することを嫌つた。

武士の訓育にあたつて第一に必要とされたのは、その品性を高めることであった。われわれの祖先が到達した精神的境地として、今日でも範にできる部分は多い。

武士道は、神道、仏教、儒教が結合してできた日本独自の精神である。

本年は、「武士道」発刊一〇〇周年になります。倫理観の乱れが気になる昨今、「武士道」の終章に書かれた言葉がたいへん印象的であったので、次に紹介します。

武士道は、一個の独立した道徳の掟としては消え去ってしまうかもしない。しかし、その力は、この地上より滅びはしないであろう。

その武勇と文徳の教訓は、体系として崩れ去るかもしない。しかし、その光明

と栄光は、その廃虚を乗り越えて、永遠に生きてゆくであろう。その象徴である桜の花のように西方の風に吹かれて散り果てても、その香氣は、人生を豊かにして、人類を祝福するであろう。

一〇〇年の後、武士道の習慣が葬り去られ、その名さえ忘れられてしまう日が来ても、その香氣は「路辺に立ちて眺めやれば」目に見えない遠い彼方の丘から、風と共に漂ってくるであろう。

それは、まさにかのクエーカーの詩人が歌った美しい言葉のように。
いすこよりは知らねど

近き香りに

旅人はしばしやすらい歩をとめて

ゆたかなるその香りをなつかしみ

高き御空のいのりを聞く

※旧家の家訓（江戸末期か明治初期か）

この時代に既に、商家・農家でも家訓を掲げ、あきない（商）をする者の生き方の指針としていました。

これはまさに勤労を大切にする倫理観が庶民のところまで及んでいたことを物語るものであり、日本独自の文化は、職業倫理の面でも決して西欧に劣るものではなかつたといえます。

近年、ふとしたことからわがクラブの切替尊敏会員の家訓の解説を依頼されたご縁で知り得たものです。

この家訓全文は、巻末の参考資料に掲載しました。

日本・アメリカの国際比較

江戸時代に、世界の思想家に比較して劣らない職業倫理の理念を説いた社会思想家がいたと聞いていますが。

そのとおりです。戦後、一部の評論家や哲学者によつて紹介されるようになります。「日本資本主義の精神」の著書で知られている山本七平（一九二一～一九九一）は、江戸時代の経済思想を支えた思想家として鈴木正三（一五七九～一六五五）と石田梅岩（一六八五～一七四四）を挙げています。この稿では鈴木正三の主張した理念について、専門学者の研究をとおして紹介することにします。石田梅岩については、すでに一章で紹介しましたが、更にくわしく人間像について触れてみたい

と思います。

鈴木正三は、石田梅岩が心学運動を始めた頃からぼ一世纪前、江戸時代初期に日本で初めて職業倫理を提唱した啓蒙的社會思想家といわれています。文化勲章受章者で仏教学者として著名な中村元博士は、国史辞典（吉川弘文館）で次のように解説しています。

江戸時代前期の独創的思想家、通称九太夫、正三は俗名であるが、出家したのちにもその名を襲名した。武家の出身で、関ヶ原、大阪冬の陣に出陣、元和六年四二才で出家禅僧となる。曹洞宗に属したが、仏教学については無学を誇り民衆のために、もっぱら仮名書きの邦文のみで著作活動を行つた。代表的著作は「万民徳用」であり、正三の思想を最もよく伝えている。

これによると、従来の仏教の陰遁的な傾向に反対し、あらゆる職業が仏のはたら

きを具現しているものであると主張した。

世俗的職業生活に努力するうちに仏道修業が実現するといい「何の事業も皆仏業なり、人々の所作の上において成仏したまうべし」と教えた。職業倫理のうちに仏教の中核があると説いた。日本では正三が最初であると自ら誇っている、と。

正三の著作から、もう少しその思想について紹介しましょう。彼は、この時代にすでに職業を分類しているのです。

武士なくして世治るべからず、農人なくして世界の食物あるべからず、商人なくして、世界の自由成るべからず、この外所有（あらゆる）事業、出来（いで）て、世のためとなる。天地をさたしたる人もあり、文字を造出したる人有り、五臓を分けて、医道を施す人もあり、その品に限りなくでて、世のためになるといえども唯是れ一仏の徳用なりと説いています。そして、武士日用、農人日用、職人日用、商人日用と合わせて「四民日用」とし、それぞれの職業についての処し方を教えたの

です。日用というのは、日常用いるもの、毎日使うこと、いつも使えるものという意味です。後に、修業の念願（七項目）三宝の徳用（一〇項目）と四民日用を合わせて「万民徳用」と題しています。働く者に勤勉の必要を説いたのです。人はなぜ働くのか、いかに働くべきか、働くことの意味を説いたのです。

江戸時代の初期、職業についてのこの卓見は見事なものといえましょう。

四民日用については、中村元博士の著書、「近世日本の批判的精神」の七巻に詳細に解説されています。

ここでは「商人日用」のみ紹介することにします。

商人は質問をなげかける（問答形式）

「商人問ふて云わく、たまたま人界に生を受けるといえども、つたなき売買の業をなし、得利を思う念休む時なく菩提にすすむ事叶わず無念の到なり。方便をたれ給え。」

この質問に対しても正三は、端的に利益を追及すべきことを教える。

「答えて云わく、売買せん人は、先ず得利を増すべき心づかいを修業すべし。」

ところで、その利益を得るためにには、商人は、正直の徳を学ぶべきことを強調している。「その心づかいと云うは、他のことにあらず、生命を天道に抗して一筋に正直の道を学ぶべし、正直の人には、諸天のめぐみ深く、仏陀神明の加護ありて、災害を除き、自然に福を増し、衆人愛敬淺からずして万事に心を叶ふべし。」

私欲を専らとして、自他を隔て、人をぬきて得利を思う人には、天道のたたりありて、禍をまし、万民のにくみをうけ、衆人愛敬なくして、万事心に叶ふべからずと説いている。

さて、ここで他の研究者の正三像について紹介しましょう。

正三研究家として著名な神谷満雄教授は、その著書「鈴木正三、現代に生きる勤勉と禁欲の精神」で、正三の思想の独創性について、次のように指摘しています。

正三が目指したものは、一人ひとりが三毒（むさぼり、いかり、ぐち）という心の病におかされていて、これが人間存在の現実であるので、まず、人びとがそれを捨て去ることを求め、人がそれを捨てれば、庶民大衆が生活している共同体がよくなると熱っぽく説いた。そのためには、自分の仕事に専念すること、仕事に打ち込むという態度を守ることが、仏道修業そのものであることを繰り返し唱道して倦むことがなかつた、と。

神谷博士は、さらに次に紹介するような注目すべき職業観の国際比較を試みています。

正三がこのような職業観を唱道した時期よりおよそ百年前、ヨーロッパで、マルチン・ルター（一四八三～一五四六）が天職の概念を次のように考えていた。神に喜ばれる生活を當むための手段は、ただ一つ各人の生活上の地位から生ずる世俗内

禁欲義務の遂行であつて、これこそが神から与えられた「召命」にほかならない。正三は「職人日用」の冒頭で、「何の事業も皆仏業なり、人びとの所作の上において成仏し給うべし」という言葉を記している。

世俗の職業生活に道徳的性格を指摘した点では、ルターも、ジャン・カルヴァン（一五〇九～一五六四）も正三と同じような勤労の構造を考えている。与えられた仕事を天職と心得て仕事に打ち込むことが修業そのものであると考える点で、勤労の意味が宗教的性格を強く帯びたものであることを指摘している点も同じである。

麗澤大学保坂俊司教授は、神谷教授のこの著書の巻末で、鈴木正三について次のように記しています。

「日本人は、正三の「万民德用」を通じて自らの文化の奥底に形成された経済思想、職業倫理思想を自覚することができるようになったのである。言葉を言い換えれば、日本人が無意識的に形成し、共有してきた経済、職業倫理が正三によって言

語化、思想化されたのである。そして日本人は、正三の教えを通じて自らの文化に内包されていた経済、職業倫理に覚醒したのである。」

ところで、ヨーロッパにおける資本主義発展のルーツに宗教が大きくかかわっていたとするヴェバーの学説は周知のことです。それでは、日本の資本主義はどうであつたのか、その疑問に答える明解な解説を紹介しましょう。宗教社会学者として著名な橋爪大三郎教授は、その著書で次のように指摘しています。ヴェバーの学説は、社会科学の定説ですが、それなら日本人はなぜ勤勉なのか、宗教（キリスト教信仰）を持たない日本人がなぜ資本主義を成功させたのか、「山本七平」は著書「勤勉の哲学」で禅宗の鈴木正三や、心学の石田梅岩ら江戸時代の思想家に日本人の勤勉の思想的ルーツを発見しました。それをベースにした日本人の暗黙の行動様式を「日本教」と呼んだのです。

明治時代は、日本歴史の中で近代化のあけぼのといわれているように、政治・経済・社会・教育等、最も大きな変革をとげたことは周知のことです。西欧一辺倒のこの時代の風潮の中で、日本人のための道徳の必要を説いた倫理学者がいたと聞いていますが。

明治時代、西欧一辺倒の嵐の中で日本の伝統的な道徳を守る必要を説いた“西村茂樹”という思想家がいました。その思想は、今日の日本が当面する諸問題の解決に大いなる示唆を与えてくれるように思います。次に生いたちと理念について紹介しましょう。

文政二年（一八二八）佐倉藩邸に生まれ、父は禄高二〇〇石、藩主は九世堀田正篤、長じて、一八五〇年、父の死により家督を継ぎ、俸一一〇石、学問をよくし、

佐久間象山の門下として西洋兵学を学び、さらに蘭、英学を修業、若くして藩政の改革に大きな役割を果たしています。

明治六年、この時代の先進的論客として知られている森有礼、福沢諭吉、西周、加藤弘之、中村正直らと「明六社」を設立、「明六雑記」を発行して、開化思想、自由、思想の啓蒙運動を精力的に展開しています。

その後、明治九年三月には、国民の道義向上をめざし、さらに国家社会の基礎を強固にするための道義教化団体として、「東京脩学社」を創設しました。（※現在の日本弘道会）

明治一九年には、「日本道德論」を公にして、当時、西欧の模倣と追随に終始していた社会の風潮と政治の在り方を厳しく批判し、日本道德の確立を訴えています。

西村茂樹は、明治時代における卓越した道德学者であり、同時に偉大な国民道德の実践者であったのです。

明治二六年には、すべての官職を辞して野に下り、全国を行脚して社会道德の高

揚に一身を捧げ、今日の生涯教育の先駆的役割を果たしています。千葉県出身の偉人の一人として、学校教育においても紹介されています。

次に主な著作である「日本道德論」「国民訓」を通して西村の思想について考えてみましょう。

「日本道德論」

徳川社会にあっては、武士の間には儒教と固有の武道があつて、人心を鍛錬したが、維新以来二〇年たつた今日「政府には一定の国教というものなく、民間にもまた全国の人心を集攬すべき勢力を有せる道徳の教あることなし。」と西村は嘆き、「國民道徳の衰亡」は国家の衰亡につながると断言しています。

明治一九年には、「日本道德論」を公にし、世論を喚起しています。

この論旨は、国民の道徳を維持するためには、徳川時代から日本社会に浸透している儒教と西洋の哲学の長所をとつて、新しい道徳学を構成することの必要を講じ

ています。宗教は必ずしも是としないといつています。道徳実施の仕組みを次のように示しています。

第一、我が身を善くし、第二、我が家を善くし、第三、我が郷里を善くし、第四、他国の人民を善くし、

ところで、道徳はただ知っただけでは何の益にもならないので、これを実行してはじめて道徳の用を為すものであると、実践道徳の必要を説いています。

その実行とは、単に自身を修めるのではなく、道徳の教えを国中に広めることの大切さを主張したのです。さらに道徳の教えは、学校教育だけではなく、生涯にわたって教える機会を持つべきであるとして、道徳会設立の必要を提唱したのです。

ヨーロッパ等では、教会があつて、学校を卒業しても教会に行つて、その宗教を通じて道徳の話を聞く機会があるけれど、日本の場合は学校を出てしまえば、その機会をなくしてしまう。昔は武士道のようなものがあつて、それが社会の規範になつ

ていたが、今はそれを失っている。学会（協会）のようなものが主してやらなければならぬと、今までいう生涯学習の場を目指していたのです。

道徳学は、どの学術、職業人にも必要であるとして、道徳の協会に参加すれば、次のような利益があると主張したのです。

一、朋友を得ること多し。二、知識を交換する便を得べし。三、善事を行うに易し。

これをみると、当時すでに、ロータリー活動の理念に似たような考え方をもつていたのは驚きです。

ちなみに、ロータリーの発足（一九〇五）以前一八年前に日本道徳論を公にして、実践道徳を説いていることに注目すべきでしょう。

西村茂樹の先見的な思想は、その後、明治、大正、昭和と、日本社会の倫理道徳

の基本的な思想として考えられるようになつていくのです。

「国民訓」

国民訓は、西村が明治時代に相応する通俗教化の書として、貝原益軒の「大和俗訓」の十訓にならって著述したもので、その内容は、学問・道徳・生業・家倫・国役・交際・選挙・対外の八カ条に分けて書いています。

「第一學問」では、知育・德育のうち、「德育を最も大切なり」としている。「第三生業」においては、治者の要務として、「國民を勧奨して生業を勤めしめ、基衣充足するを待ち、之を道徳に導くは、治國者の要務にして、亦國民たるの職分」であるとし、また、生産力の増強が必要で、そのためには、農民も文明の学術に通じなければならず、商業も貿易が重要であるから商業道徳が必要であることを強調しています。

この著書は、近年ドイツ人学者により全訳本で出版され、日本の精神史に貴重な

貢献を果たした先駆的著作として西欧に紹介されています。

月刊誌「エネルゲイア」の道徳論講座では、西村茂樹の「日本道徳論」をとりあげ詳細に紹介しています。この稿で、

日本弘道会の鈴木勲会長は、西村思想について次のように解説しています。

西村先生の道徳思想の根底には、つねに「利他」の心が宿っていると思う。利他の心は、人間倫理の基礎であり、善なるものである。日本の教育に欠けているものは、利他の教育ではないか、もともと西欧でいう個人主義は、絶対者の前の個人として立つときの倫理的意味をもつたもので、自分が幸福になればいいという利己主義ではないのです。利己の反対は利他であり、自分をさしおいても世のために人のために尽くすという利他の心は人間倫理の基礎である、と。

この考え方は、ロータリー理念の構築に携わったといわれているコリンズによる“Service Above Self” “[超越して相手を思う心]” “奉仕の心” と、何等変わり

はないと思いませんか。

先にも指摘しましたが我々ロータリアンとして、特に注目すべきことは、アメリカ文化の中で発想されたロータリーの理念と、日本の伝統文化を基盤に主張された“日本道徳論”とは、その思想の根底は全く同じであるということです。

一八世紀、アメリカが各国の植民地の時代、独立宣言前後の経済、社会に多大な影響を及ぼした思想家といわれている“ベンジャミン・フランクリン”の思想について知りたい。

フランクリン（一七〇六～一七九〇）は貧しいピューリタンの移民の子に生まれ、徒弟期、印刷工を経て、二二才で印刷、出版業を經營する事業家になっています。一七四八年には、政治家を志し、市会議員に選出され、その後ビジネスの第一線を退き、著述業と研究、政治活動に専念しています。四五才でペンシルベニア州の市会議員となり、五八才で議長に選ばれ、イギリス重商主義の植民地政策を批判しています。一七五〇年以後、植民地の利害を代表する政治家、外交官として活躍、一七七六年、独立宣言の起草委員をつとめ、一七八七年、アメリカ憲法制定に参与し署名しています。その後フランス大使を経てペンシルベニア州知事に迎えられ、一

七九〇年、波瀾に満ちた生涯に幕を閉じています。

一七三一年、知的訓練の場「ジャントウークラブ」を経て、「十三徳」を樹立、節約・勤勉・誠実・正義・中庸・清潔・平静・純潔・謙遜の徳目を厳しい戒律として生活の中で実践を要求しています。

彼の著書「富への道」（アドバイス・トウ・ヤング・トレーヴマン・一七五八年）はよく知られています。富を得る手段は、徳によるエートスが前提であること即ち、怠情・愚かさ・虚榮心・時間の浪費や不注意を戒め、自主独立・自助精神・勤勉・節約・忍耐・勇気・向上心・用意周到等の実践が必要であると問っています。フランクリンの活動やその思想、価値理念は、アメリカ社会や、工業化に多大な影響を与えたのです。“富への道”は一五ヶ国に翻訳され「自伝」は聖書について広く国民に読まれたといわれています。

彼の思想の中核をなす徳目は、単なる羅列ではなく、ビジネスマンが遵守すべき基本原理と考え、その根底にあるものは、人道主義による市民エートスであり、人間にとつての生き方や、人間関係のあり方を示唆しています。彼は宗教的には、どの宗派にも属していませんでした。基本的には、プロテスタンントの倫理的影響を受けていたことは、明らかであります。

マックス・ヴェバー研究で著名な山之内靖博士は、著書「マックス・ヴェバーパー入門」でフランクリンについて触れてています。

「富への道」について、世俗的通俗書を超えたある倫理的な指向性が認められると注目しています。“フランクリン助言”を読んでいくと、そこには一切の幸福主義や快樂主義には目もくれずに、生涯を職業的な労働に捧げるのだという観点が徹底して、終始一貫、あたかもそれが自己目的であるように貫かれていています。通俗的な意味での人生の指針といったものを越えた、厳格で禁欲的なエートス、倫理的な

精神が含まれていると指摘しています。

ところで本誌について資料収集中に、ロータリー創始者、ポール・ハリス著作の、“THIS ROTARIAN AGE”で次のような注田すべき一節に出会ったのです。

ロータリーの最も独創的な特徴は、いわゆる職業別会員制度であるが、決して独りロータリーの創意にかかるものではない。ロータリーがまだ出現しなかつたはるか以前に、職業別制度をとつていたクラブがあつた。ベンジャミン・フランクリンがフィラデルフィアに創立したクラブである、と。

ポール・ハリスがロータリーを結成した約一五〇年前のことです。ベンジャミン・フランクリンの発想が時を超えてロータリーで開花したといえましょう。日本においても、鈴木正三の思想が、一世紀の後に石田梅岩により新たな構想で職業倫理の理念が確立されていく過程に似ています。

一六世紀から一九世紀にわたって職業倫理の理念を提唱した四人の思想家、鈴木正三、石田梅岩、西村茂樹、ベンジャミン・フランクリンを生んだ時代とその背景に共通のものを感じますが。

石田梅岩の時代（一六八五～一七四四）

梅岩が心学運動を始めた享保の時代は、元禄時代のバブル経済がはじけて、將軍徳川吉宗による享保の改革が行われ、質素儉約奢侈禁止の政策が掲げられていた頃です。産業振興を目的としていたのですが、景気の沈滯は想像以上のものがあり、社会の乱れは加速していたのです。特に町人社会の乱れはひどく、儒学者、荻生徂徠（一六六六～一七二八）経世家、林子平（一七三八～一七九三）等により「町人無用論」までとびだす一因になつたようです。

これ程までに乱れた商人の非倫理性に大きな危機感をもち、梅岩は心学運動を始めたといわれています。当時、梅岩は

「汝獨、売買ノ利バカリヲ欲心ニテ通ナシト云ヒ、商人ヲ惡ンデ断絶セントス。
何以テ商人計リヲ賤メ嫌フコトゾヤ」

と町人無用論者に抗議しています。又、彼は、「もし聞く人なくば鈴を振り町々を廻りてなりとも人の人たる道を勧めたい」とまでいっています。

堺屋太一は、次のように評しています。

石田梅岩によつて創始された石門心学は、世界に誇るべき独創的哲学である。これ程ユニークな発想が今日に至るも日本人の本能にまで食い込んでいるのは怖ろしいばかりである。(詳細は“日本を創った二一人後編” 参照)

鈴木正三の時代（一五七九～一六五五）

戦国末期から四代将軍家綱までの混乱の時代から、秩序確立の時代までの過渡期に位置しており、梅岩の時代が町人の成長期から停滞期への転換期であったとするなら、正三の時代は、まさに武士のそれであったのです。「足軽から大閣へ」の夢もなくなり、心理的閉塞状態を招いていたのです。士農工商は徐々に固定していき、人々が何に「生きがい」を求めてよいかわからない時代を迎えていたのです。このような社会情勢の中で、正三は、日々の業務の中に宗教性を求めることに解決を見いだそうとしていたのです。

職業に対する考え方、正三の職業観は、くわしく紹介したように極めて近代的な発想をもっていたといつて過言ではないでしょう。

山本七平はその著書「日本資本主義の精神」で日本の資本主義の倫理の基本は、一七世紀の時代から正三によつて築かれていったと論じています。さらに、正三、

梅岩を生んだ江戸時代について、江戸時代は日本歴史の中で、最も興味深い時代であり、一言でいえば、「日本人の自前の秩序」を確立した時代であり、それが三〇〇年近く継続した時代であるからである。明治時代のように、西欧を模倣し、戦後のようにアメリカを模倣した「マネ時代」でもなく、古代のように中国のみが典拠であった時代でもなかった。「マネ時代」ではないという意味では、最も独創的な時代であった、と。

西村茂樹の時代（一八二八—一九〇一）

西村の活躍した明治の時代は、あえて解説するまでもなく、日本歴史上最大の変革の時代であったといえましょう。西欧文化が怒濤の如く流入してきた時代です。

彼は若年の佐倉藩士の頃、佐久間象山の門下として欧米文化をいち早く学び、豊かな才能を認められていました。明治になり、政府の中枢に招かれ活躍しています。

しかし、歐米文化一辺倒の政府の政策に対して、特に日本人による日本人のための國民道徳の樹立を提言したのですが、時の首相、伊藤博文の意にかなわず、文部大臣、森有礼より、當時設立の動きのあった東京大学学長就任の要請を断わり、野に下っています。

西欧一辺倒のこの時代にあって、自己の主張を貫くため野に下り、日本道徳の確立のため生涯を捧げた反骨の姿勢は見事といえましょう。

西村茂樹の辞世の言葉を紹介しておきます。

「我れ百年の後に再び聖賢となりてこの世に現れ、我が日論を全うせん。悔ゆべきことなにもなし。」

フランクリンの時代（一七〇六～一七九〇）

フランクリンが生きた一八世紀のアメリカは、独立戦争（一七七五）そして独立宣言（一七七六）ワシントンが初代大統領に選ばれる、（一七七八）イギリスの植民地支配からの独立、重商主義排除のための戦いでした。アメリカの民主主義体制の基礎を築いた大変革の時代であったのです。文化的には、ヨーロッパの近代思想の影響を受け「理性の時代」「啓蒙の時代」とも呼ばれていました。宗教的には、厳しいピューリタニズムの神政政治に代わり、現実の社会や経済に適応したプロテスタンントの神学や、倫理思想が出現しつつあった時代です。

フランクリンは、まさにこの時代の子であり、時代に先行した思想家、革新者で
あつたのです。

職業倫理理念の源流をたずね、日米の比較を試みたのにはどのような意図があつたのですか。

ロー・タリーの理念、特に職業倫理について深めていたぐための作業でした。読んでいかがお感じになつたでしょうか。日本にも三五〇年も前からアメリカ社会と共通する考え方が論じられていましたことがご理解いただけたでしょうか。江戸時代初期に世界に通ずる倫理思想が独自に育まれていたことに、日本文化の豊かさを再認識されたことだと思います。さらに、ロー・タリー発足（一九〇五・明三八）以前、明治一九年に発表された西村茂樹の日本道徳論は、実践倫理の思想としては、ロー・タリーと同様の行動倫理を目指していたこともおわかりいただけたことでしょう。

ただし、ロー・タリーの理念に近い西村の実践哲学が残念なことに、その後国内において企業人の中でロー・タリーのように浸透しなかつたのは何故だったのか、疑問

が残ります。私見を述べておきましょう。

西村茂樹は広く国民道徳の高揚を目指していましたが、国際ロータリーは、職業人の倫理という世界に共通する理念の構築と、その運動体の組織化に成功したからではないでしょうか。それぞれの国には、仏教・キリスト教・儒教等を背景にした伝統倫理がありますが、働く者、職業人のるべき姿を求めるということでは、国を越えて共通点があり、共感をもって迎えられたのではないかと考えます。この意味では、ロータリー会員の中に、アメリカで生まれた組織だからとというだけで所属していることに疑問を持ったり、拒否反応を示す方がいると巷で聞こえますが、無意味な声といってよいでしょう。

さて、この稿を書き終えて、今日の日本の現状に思いをはせばにはいられません。第二次大戦により壊滅的打撃をこうむった日本経済は、我々の世代の人たちにより世界に注目されるような驚異的復興を果たしました。世界一、二といわれるまでの

富める国の座を占めることが出来たのです。しかし、その結果はどうでしょう。この国の社会の有り様は、一〇〇年前、マックス・ヴェバーが予言した富める国の生体、「精神のない専門人、心情のない享楽人」の出現そのものではありませんか。

ノーベル賞受賞者大江健三郎は、次のように日本の現状を指摘しています。

バブル崩壊から続く日本の政治・経済の長期的な混迷、それは「文化の総体にかかるわる大きな問題であり、日本人のモラリティはあらゆるレベルで崩壊しつつある。」

一方、ひるがえってロータリーの現状はどうでしょうか。国際ロータリーも創立の原点にもどるべきだという声が高いのは皆さんご承知のとおりです。

我がクラブの齊藤博パストガバナーは、二〇〇一年九月のガバナー月信に次のように危機感をもって一文を寄せてています。

昭和三年来日の国際ロータリー フランク・マルホランドの言葉を引用し、「ロータリー運動の中心は、ロータリー・クラブ、ロータリーの第一義は、ロータリアン

の魂の自覚を促すことである。ロータリアンの質的思考、これを除いて国際ロータリーに依存したとき、ロータリー運動は危機を迎える。クラブを大事に、自己研鑽のエネルギーを育てられよ」と説いているとし、さらに先人達は、素晴らしい思想を開発し、行動哲学と密着した形でロータリーの思想として、運動体として、原理と実践を体系的にまとめあげました。その高遠な理想が新鮮な響きをもって人々の心を捕えました。しかし、決議23～34を疎んじ、道徳律をはじめとして文化史上の遺産を弊衣の如く捨て去った、と。

長期にわたって、日本ロータリーの指導的立場にあるパスト・ガバナーのこの発言は、国際ロータリーの危険な最近の動向に対し、血のにじむような心の叫びとして受け止めずにはいられません。もって銘すべきです。

※日本弘道会 明治九年西村茂樹は国民の道義向上をめざし、道義教化団体「東京脩身学社」を創設、その後「日本弘道会」と名称を変え現在に至っています。

全国に支部、会員をもち、倫理道德普及のため積極的な活動をしています。会長は、元文化庁長官、鈴木勲（元千葉県教育長）

日本弘道会発行の機関誌

※エーネス（ethos） 道徳的価値・民族の気風・精神

※人物年表

。マルチン・ルター

〔文明一五〇天文一五 戦国時代
一四八三～一五四六 室町時代後期〕

。ジョン・カルヴィン

〔永正六～永禄七 戦国時代
一五〇九～一五六四 室町時代後期〕

。鈴木正三

。石田梅岩

天正七～明歴元

一五七九～一六五五

安土桃山時代～
江戸時代前期

貞享二～延享元

一六八五～一七四四

江戸時代中期

。ベンジャミン・フランクリン

宝永三～寛正二
一七〇六～一七九〇

江戸時代中期～
江戸時代後期

。西村茂樹

文政一一～明治三五
一八二八～一九〇二

江戸時代後期～
明治時代

。マックス・ヴェバー

元治元～大正九
一八六四～一九一〇

江戸時代後期～
大正時代

。新渡戸稻造

文久二～昭和八
一八六二～一九三三

幕末～昭和時代

。ポール・ハリス

慶應四～昭和二二
一八六八～一九四七

幕末～昭和時代

。フレデリック・シェルドン

慶応四～昭和一〇
一八六八～一九三五

幕末～昭和時代

。フランク・コリンズ

天正一〇
一九二一年没

。チエスリー・Rペリー

明治五～昭和三五
一八七二～一九六〇

明治時代～
昭和時代

。米山梅吉

慶応四～昭和二一
一八六八～一九四六

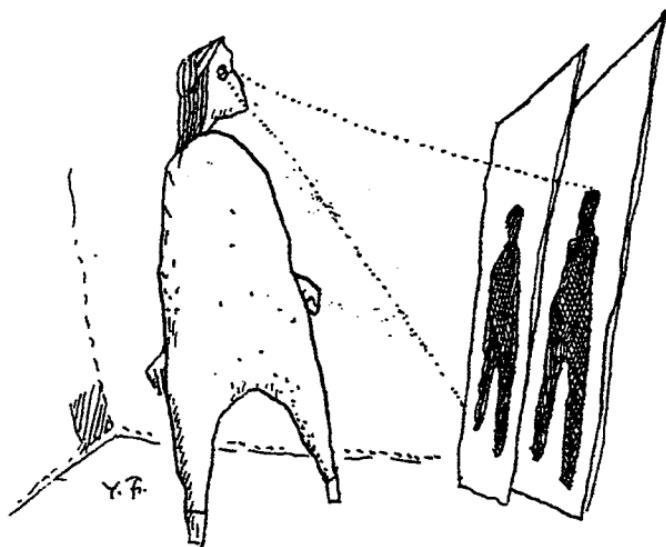
幕末～昭和時代

第2章

ロータリーの実践

「ロータリー運動の親睦の本体は、円滑な人間関係の基礎的法則を極めることにある」

フレデリック・シェルドン



ロータリーにおけるクラブ・サービスとはどんなことをするのですか。

ロータリーの友編「ロータリー問答」によると、次のように解説しています。

「ロータリーにおけるクラブ・サービス」というのは、まず、

第一に、クラブ諸会合に出席してお互いに親交を深くすることあります。

第二には、クラブの諸計画に参与することであり、

第三には、委員に任命されたなら、その委員会で忠実に働くことであり、

第四には、役員に選ばれたなら喜んでその最善を尽して職務に当たることであり、

第五には、会費を支払うことであり、

第六には、ロータリーをロータリアンでない人に良く知らせるとか、他のロータリー・クラブで話をしたり…略…要するにクラブの諸活動に進んで参画、参与し、クラブの向上発展に尽すことあります。

ここでいう「クラブ・サービス」は、四大奉仕活動の一つであるクラブ奉仕活動の意味ではありません。ロータリー活動全体を指しています。

なお、四大奉仕活動はござんじのように、クラブ奉仕・職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕の諸活動です。その活動内容はと、問われれば綱領と対比してください、といいます。綱領が意図していることを、それぞれの活動で実践されることが期待されているのです。

委員会活動を担当して、このようなことにどんな意味があるのか、と思う時があります。しかも、一年限りでは満足なこともできない。

入会して一度は、あなたのような疑問をもった人は少なくないと思います。

ご承知のように、すべての会員は何れかの委員会に所属し、一部の委員会を除いて、毎年所属を交代しています。そして各委員会とも二名以上の委員によつて運営されています。

あなたのような疑問や不満の原因は、次のようなことが背景になつてはいないでしようか。

委員長が一人で仕事をしてしまつて他の委員との会合を全く持たないことがある。多忙にかまけて現実にはこんな委員会もあるようです。これではロータリーが目指している委員会活動（クラブ奉仕活動）を通しての交友の深まりは一年経つても期

待できません。所属を毎年交代するのも、多くの会員との交流を期待しているからです。

委員会活動こそ例会の場で満たされない親睦を補完する場でなければならぬのです。

ホーム・ミーティング、

ミニ集会、

時には飲み集会でもよいでしょう。

集まって、顔を見せて、おおいに語ることのできる活気のある委員会になるよう会員相互の努力が望られます。

再度、綱領を確認してみましょう。

第一に、「奉仕の機会として、知り合いを広めること」とは、ロータリー活動は、出会いから始まり、多くの会員との交友を深めることにより、相互啓発を図ることを期待しているのです。

先に申したように一部の委員会の停滞が、全活動の意欲を阻害することにもなりかねません。クラブの運営に当たる各年度役員や委員長のリーダーシップが問われます。

ロータリーは、まず親睦が大切だといつていますが、その意味するとこらは、なんでしょう。例会出席だけではなかなかその親睦を深める時間も少なく、いまいち満足感がないのですが。

まず、ロータリーがなぜ親睦を強調するかについて説明しましょう。

親睦の意味について、シェルドンは「親睦の本体は、円滑な人間関係の基礎的な法則を極めることにある」と、いっています。たいへん意味の深い言葉です。私の解釈では次のようになります。

- ・まず、会員相互の人間関係を深めることに努力しなさい。
- ・人間関係が深まることによって、人格の触れ合いが濃くなり、相互啓発が進みます。そしてより高い徳が備わることになります。己を抑制し、相手を思いやる寛容の心を育むことができるということです。

次に、コミュニケーションをとるための機会の不足については、ご指摘のような不満を私も感じたことがあります。例会の出席、例会の運営、委員会活動を通して得ることも多くあるのですが、何かもの足りなさを感じます。

二、三年後、この不満は、私自身の心の内にあったことに気付きました。それは、人生の先輩、後輩を問わず、能動的に接する努力が足りなかつたことでした。与えてくれること、接してくれることを期待していました。これは一種の甘えであつたのかもしれません。ミニ集会、親睦活動等に積極的に参加し、人間好きになるよう自らの努力が必要であったと感じたのです。そう考えを切り換えた出席が楽しくなつたのです。

幸いに、ロータリーでは、すべての会員は同等の立場で交わることを原則としています。大企業の社長、中小企業の事業主であれ、年齢の差なくフランクに交友を深めることを求めています。この考え方はたいへん魅力があり、他の集団では見当らないことです。

誰にでも、気軽に声をかけられる。そして接することができるということは、経営者や管理者として必要な資質の一つではないかと思うのです。

他地区の話として聞いたのですが、クラブ内に不協和音があり、これが原因で、退会者や分裂があったという。どんな組織でも人間のいるところ少からず避けられないことでしょうが、一定水準の知識人の集まりであり、倫理運動を目標にしているロータリーに限ってこんなことはないと信じていました。

ご意見のように道徳水準の向上を目指しているロータリーにとって、このような話を聞くことは大へん残念なことです。クラブ内で、なぜ改善の動きがなかったのか淋しい話です。

私もしばしばこの人がロータリアンかと思われる言動に接することがあります。ロータリアンといえども徳を積んだ人ばかりではなく、まだまだ他に学ばねばならない人もいるということです。このような人も自己改善の必要を感じて、良き友を求めてロータリーに入会しているかもしれません。年を重ねるにつれて周囲の徳を

積んだ人の影響を受けていくことになるでしょう。

仮りにロータリアンらしくない言動に接した時は、反面教師として自戒の糧にするよう努められたらいかがでしょうか。腹をたてなくてすみます。

一〇〇〇年前の東西の偉人の言葉を紹介しましょう。「人々からしてほしいと望むことを、人々にそのとおりしなさい。」

Do to others as you would be done other's ローランドは、Golden Rule 黄金律と称し、人生の生き方の指針として大切にされています。ロータリーの創始者、ポール・ハリス、そして、日本ロータリーの始祖米山梅吉共にこの言葉を座右の銘にしていましたと聞いています。

孔子の言葉で、己所不欲勿施於人「己の欲せざる所、人に施すことなかれ、は、黄金律と同様の意味をもっています。

人類は一〇〇〇年前、既に人としての生き方の指針としてこのような言葉を得ていました。一〇〇〇年経った今日も残念なことですが、人間の心や行動は進歩して

いとは思われません。

世紀末のたいへん混濁した時代、倫理を運動の柱としているロータリーに所属する者の役割は真に大きいものがあります。

近年、価値観の多様化が進み、人間関係の処理も難しくなっています。ロータリアンも原点に回帰し、足元を見つめていく必要を感じます。

卓話で、哲学や歴史、やれヴェバーとか、カルヴァイン等といつても、あまり興味もわからない。宗教くさいところも気になる。もっと親睦を深めることに役立つことをやつたら、という意見がありますが。

「指摘のようにこのような話ばかりでは、いささか退屈なこともあります。しかし、あなたも会員ですから、一切こののような話は必要ないといつては思えません。あくまでもプログラム作成上のバランスの問題だと思います。私も先輩会員から忠告された記憶があります。

「例会活動は、一面、会員のオアシスの場でもあることを念頭においておくことが大切である。」と、厳しい競争の中で日夜心身をすりへらしている会員にとって、週一回の昼食を共にするこの会合は、心のゆとりをとり戻す憩いの場であることに留意した例会運営は当然必要なことです。

会長や会の運営を支える各委員長によるきめ細かな対応が期待されています。

さて、歴史とか哲学の問題についてですが若干、わかり難いこともあるでしょうが、そう嫌わずに根気強く耳を傾けて下さい。

歴史をテーマにした小説や評論で多くの著書のある小説家で、元経済企画庁長官の堺屋太一は、「歴史こそ、次の時代のあり方を示唆してくれる貴重な資料である」と、歴史を学ぶことの重要さを強調しています。一九九九年の地区大会において、京都大学の中西輝政教授は、「大国の衰亡」と「日本」の講演で、社会のモラルの退廃はその国の国力の衰退の予兆であることを歴史が証明していると断言されました。たが、今日の日本への警告と理解しました。（地区大会記録参照）「温故知新」二十世紀の現代でも孔子のこの言葉は新鮮です。日本の社会に、そしてロータリーの現状に改革の必要があるとすれば、歴史は適確に将来のあるべき方向を示してくれるにちがいないのです。

* ロータリーは宗教的という意見については、

* 創立時には、宗教的色あいが濃かったことは否定できません。しかし、会員が世界的広がりを持つに至って、既に説明してきたように、ロータリー独自の理念を構築しているのです。宗教とは全く関係のない倫理運動であることを特に申しておきます。

* ロータリー創立当時考えられていた職業倫理の背景は、プロテスチアントの影響を多分に受けているといえます。

由「自己」、「自己」犠牲をもつて奉仕と考えていたことからわかります。(Service, Not Self) しかし、一九一一年の国際大会におけるショルズンの「ロータリー奉仕の哲学」(Philosophy of Rotary) 発表から、ロータリーは独自の理念が構築されていきます。

高校生に対する職業相談や職業情報の提供は、職業奉仕の範疇には、入らないといいます。

この質問には、職業奉仕と社会奉仕の相違を明確にしないと誤解が生じます。

国際ロータリーの職業奉仕に関する新声明について、日本国内で先輩ロータリアンから反対の声が渦巻いています。

結論から申しましょう。職業奉仕とはいいません。社会奉仕の分野です。

次にその理由について説明しましょう。

二七九〇地区職業奉仕委員会「シンポジュウム」において、パネラーの鈴木憲輔パスト・ガバナーは次のように話しておられました。

「国際ロータリーの職業奉仕の考え方は何故に反対するか」というと、これまで職業奉仕というと再三申し上げましたように、自らの職業を通じて社会に奉仕すると

いうことでした。それは職業人として自らの社会的責任の遂行であり、又、この世に生まれてきた人間としての最も大きな使命でもあると、私は考えています。

ところで、国際ロータリー「新方針」では、これを職業相談、職業指導、職業活動表彰というような他人の職業の支援だけにしようとするものです。」

既に職業奉仕の質問の稿で説明したように「自己研鑽をしながら職業生活に活かす活動を職業奉仕といっています。あくまでも職業人個人の人格修練の場を指しています。従って、職業相談者等は、ロータリーの四分野からすれば、社会奉仕と考えるのが自然です。綱領の第二でも「自己の道徳水準を高め：各自の業務を通じて社会に奉仕する…」と、うたっています。論理的矛盾を感じざるを得ません。従つて、医師による過疎地区の無料診療や弁護士の無料相談等はどうかと問われれば、これも社会奉仕なのです。

しかし、社会奉仕なのか、職業奉仕なのか判別し難い奉仕活動もあります。参考までに深川純一・パスト・ガバナー（二六六〇地区）の見解によれば

「社会奉仕と職業奉仕を分かつマルクマールは、だれが受益者かということあります。受益者がロータリアン自身である場合は、職業奉仕といいます。ロータリアン以外の人達が受益者の場合は、社会奉仕というのであります。」

さらに優良従業員の表彰については「社会奉仕70%、職業奉仕30%と理解すればいい。」

ロータリアンの社会奉仕活動は、個人奉仕が前提といわれていますが、具体的な活動事例を知りたい。

ご承知のように、ようやく日本でもボランティア活動が活発になっています。国もNPO法を制定し、千葉県でもNPO法人認証団体が三〇〇近くなっていることは、大変歓迎すべき傾向にあります。

さて、国際ロータリーでは別掲（参考資料（三））のように社会奉仕準則を示しております。その一つにロータリーの社会奉仕活動は、既存の活動の支援を否定するものではないが、いまだ支援されていない部分にロータリアンの高い奉仕の精神が生かされることが望ましいとあります。

このことにはまる好事例がありますので紹介しましょう。

この程、我がクラブの有志と地域の文化人グループが中心になって、NPO法人

コミュニティフォーラム上総更級会というボランティア団体を結成したのです。

活動目標は、教育、文化、芸術、福祉活動の活性化を目指すもので、結成後、数カ月にして県内で注目されるような活発な活動を開催しております。今までにない新しい街づくりの活動として市民から期待されています。

ところで、この会の組織化、事業資金確保、運営方法等、ロータリアンの経営経験が大きな役割を果たしております。ロータリアン個人個人の支援なくして、これ程まで短期間に成長しなかつたと思っています。ロータリアンの奉仕の意識が会の支えになっているのです。

さらに、行事の遂行で、市民と協働で活動することによって、市民の間に奉仕の意識の大切さが育っていくのを体感しています。

自由主義は、それを適度に抑制する文化がないとうまく機能しないといわれています。ロータリーも又、自由な商業活動から生ずる様々な弊害を抑制する役割をもって誕生した組織と考えられます。しかし、近年の自由オンリーの市場第一主義についてどう思っていますか。

ご指摘のように、近年、日本経済、いや世界の経済は、自由競争一色の市場第一主義の真只中にあります。自由競争が維持されれば社会のすべてがうまく機能するという考え方が世界をかけめぐっています。しかし、この考え方が経済活動の方として最善なのか最近の世情に疑いをもちたくなる様々な現象が現れています。

このような危機感は筆者のみとは思っておりませんでしたが、最近、心からの共感をおぼえる著書に出会いました。先に紹介した一橋大荒井一博教授によるものです。

内容の一部を紹介しておきます。

- ・自由競争讚美の市場第一主義の跋扈で、バブル経済期以降、日本経済は深刻な混乱に直面している。だが、自由は果して絶対の善だらうか。
- ・自由競争讚美論が隆盛になるにしたがつて「法を犯さないかぎり何をしても自由だ。」という考え方が多く、日本人の心を占領してきている。学校や家庭でも子供が「何をやっても自由だ。」といふと、教師や親は何の反論もできない。学級崩壊からもそれは推察できる。
- ・自由や競争は、今日、マスコミの多くが最も重視する価値である。規制緩和や流动的労働市場を強く主張するその論調はそこから派生している。
- ・新古典派経済学の最も基本的な主張は、すべての人間が自己利益を追及して自由に行動すれば、経済はすべてうまく機能する。資源配分も最適になるというが、この見解は明らかに文化的要素が欠落している。伝統的な価値に従い（倫理、人間観、自然観、美意識）各人が私欲を抑制して行動することによって達成される

秩序に美しさや喜びを感じるという側面がそこには見られない。

- ・日本には、自由競争と異なる文化があり、伝統的な日本社会は、志や他者への配慮を重視してきたことを知っている。しかし、こうした文化は、今の日本では極端に経視されるようになつた。現在「人のために尽せ」などという経済学者はほとんどない。

- ・自由だけでは組織や社会が機能しない。自由以外の価値が必要なことを、家庭や学校等で繰り返し教える必要がある。特に各自が自由のみを主張していたのでは、自由が十分に享受できないことをさとすべきである。

以上、かなり詳細な紹介になりましたが、時代を直視した警世の書になっています。ぜひ、ご一読を勧めておきます。

幸いに我々ロータリアンの先人達は、先に論じられているような独自の文化をほ

ば一世紀前に世界に通ずる「職業倫理の理念」を構築しております。改めてこの伝統的倫理である「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」「奉仕の実践に関する決議23～34号」「綱領」を熟読玩味し、実践活動に当たらなければならぬと感じています。

近年、世界ロータリーでも、原点回帰の運動がややもすれば疎かになっています。愁うべき現象であります。

魅力あるロータリークラブとは。

- 1、雰囲気が明るい。
- 2、交友が深く、年令の差を感じさせない自由な雰囲気がある。
- 3、相手の尊厳を認める言動が身についている。
- 4、キャリア豊富な会員と若い会員とのコミュニケーションがよくとれている。先輩会員の能動的対応が見られる。
- 5、ロータリーを積極的に理解しようとする雰囲気が感じられる。

6、明るい雰囲気の中でも、クラブルールはきちんと守られている。

7、派閥的行動は一切見られない。

8、会員の多くに寛容の心が身についている。

9、相手を傷つけるような言動は全く感じられない。

10、クラブ奉仕に各会員が創造的、能動的に取り組んでいる。

11、ビジターに対して、ゆき届いた配慮がなされている。

12、漸新でバランスのとれた魅力のあるプログラムが組まれている。

13、理事会の内容がすべて公開され、会員のクラブ奉仕活動への参加意識を盛り上げている。

14、クラブライフを共に楽しもうとする雰囲気に満ちている。

15、キャリアの浅い会員も出会いを大切にする意識をもって、先輩会員と積極的にクラブ奉仕活動に参加している。

16、先輩会員の経験がクラブ運営の随所に生かされている。

17、会員同士の交流がクラブ外でも盛んである。

18、ホーム・ミーティング、ミニ集会等の集会が活発である。

19、会長、幹事のリーダーシップがとられている。

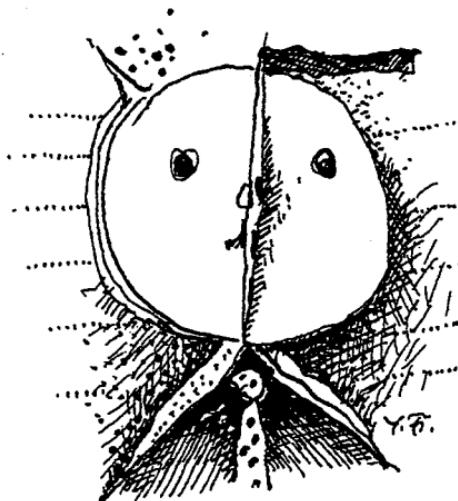
20、豊かなロータリー情報が提供されている。

21、会員であることに誇りをもっている。

22、退会者が極めて少ない。

以上、筆者の反省と期待をこめてまとめてみました。

參考資料



(1) マックス・ヴェバーの経済倫理

ヴェバーについては、すでに紹介しましたが、現代において、職業倫理を研究するものとして、ヴェバーの理論は避けて通れない古典的論文であります。

ヴェバーを知るための資料として、若干補足しておきます。

彼の二大著作の一つとされている「世界宗教の経済倫理に関する比較社会学的研究」の中で論じられている経済倫理は、世界の宗教として儒教、ヒンドゥ教、仏教、キリスト教およびイスラム教（回教）を比較研究しているところに特徴があります。一九〇五年に発表された「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は、この一環としてまとめられたものです。

彼のいう「経済倫理」とは、神学綱要における倫理学説といったようなものではなくて、個人の生活から独立して超越的に存在し、個々人外部から拘束するような客観的な規範ではなく、一面でそうした性格をもちながらも主として個々人の生活の内部に意識の背後に浸透し、その意味で内面された行動への起動力、従つて人々のかくあるべき行動を促進し、あるいはかくあるべからざる行動を抑圧するように働くところの人々の生活態度、生活信条、または、道徳的性格がここで問題となつてゐる「倫理」なのです。それは「エートス」Ethosと言われるべきものです。特に経済行為：職業労働、事業經營、営利活動などについてのそれが「経済倫理」として問題とされているのです。

前掲、尾高邦雄編

マックス・ヴェバーより

「一九一五年七月十九日～二十三日、サンフランシスコにおける第六回ロータリー・クラブ国際連合会年次大会決議」

この職業倫理基準は、われわれに共通な人間性を求める心をその骨子とするものである。自分の取引、自分の野心及び自分をめぐる諸関係は、常に、社会の一員としての自分の最高の義務を考慮に入れてのことでなければならない。職業生活のすべての地位において、自分の当面するすべての責任において、自分の主たる思考は、かかる責任を果たし、かつかかる義務を履行し、かくして、その各々の任務を完了したとき、自分は人間の理想と業績とを当初よりも幾分向上させなければならない。この見地から、本委員会の議決によれば、国際ロータリーの商業倫理訓の基本は次に掲げる原則となるものである。すなわち、

一、自分の職業に価値を認め、これにより自分は社会に奉仕すべき好箇の機会を

与えられたものと考うべきこと。

二、自分の身を修め、自分の実力を涵養し、自分の奉仕を広めるべきこと、なればにそれを通じて奉仕に徹する者に最大の利益ありとするロータリーの基本原則を実践すること。

三、自分は企業経営者であり、したがつて成功の野心を抱いていることを自覚すべきこと。だが、自分は道徳を重んずる人間であり、最高の正義と道徳に基づかざる成功はこれを欲するものでないことを自覚すべきこと。

四、自分の商品、自分の労働、自分のアイディアを金銭と交換することは、全当事者がこれによつて利益を受ける限りにおいてのみ、適法にして道徳にかなうものであるとの信念をもつべきこと。

五、自分の從事する職業の水準を向上させるため最大の努力をはらい、かくして、自分の業務の仕方は賢明であつて、利益を産み、この実例にならえば幸福の道が開けることを同業の者に知らしむべきこと。

六、同業者と同等ないしそれに優る完全なサービスを尽くすような方法をもつて企業経営を行うべきこと。また、もし完全なサービスか否かに疑念の生ずる場合には、当該責務上妥当な範囲を越えてまでもサービスを行うべきこと。

七、専門職業にたずさわる者又は企業経営者の最大の資産の一つはその友人であることを理解すべきこと。また友情に基づいて手に入れたものこそまさに倫理的かつ正当なものであることを理解すべきこと。

八、眞の友人は互に何も要求するものではなく、利益のためにみだりに友人の信頼を利用することはロータリーの精神と相容れないばかりかその倫理訓にもとるものと考うべきこと。

九、社会秩序の立場から他人が絶対に認めないような不正な方法によつて機会を利用し、これによつて得た人の成功を正当又は倫理的なものと考えてはならないこと。また、物質的成功を得るがため、人が倫理的に問題ありとしてしりぞけるような機会に乗ずるが如きことをしてはならないこと。

十、自分は一般人に対して義務を負う以上に同僚たるロークリアントに対して義務を負うものではない。ただし、ロークリアントの真髓は競争ではなくして協力であるからであり、また党派心はロークリアントの如き制度においてはあってはならず、かつ人権はロークリアントの内部に限られるものではなく、その範囲とその重要性とにおいて人類そのものの存在と同程度のものであることをロークリアントは主張するものだからであり、かつまた、ロークリアントはこの高邁な理想に向かってすべての制度に属するすべての者を教化するために存在するものである。

十一、最後に「すべて人にしてもらいたいと欲することを人に對して行うべし」という黄金律の普遍性を信じ、われわれは、地上の天然資源がすべての者に均等な機会として与えられてこそ、人類社会は最良の状態となるべきことを主張してやまないものである。

(小堀憲助氏訳)

社会奉仕準則・要訳

- ・各クラブは取り巻く地域社会にどのような問題があるか、そのニーズを調査すること、このニーズに支援することを考えよ。
- ・ロータリー本来の目的を危くするような社会奉仕活動は避けるべきです。
- ・原則として、クラブとして奉仕の実践はしません、奉仕するのは個人です。
- ・クラブとして、奉仕の実践をする場合は奉仕のサンプルを例示する場合に限り、予算の負担にならないようにすべきです。
- ・ロータリーの社会奉仕活動は、既存の活動の支援を否定するものではないが、いまだ支援されていない部分に、ロータリアンの高い奉仕の精神が生かされることが望ましい。

振舞いに紅バラの如き理想あり

また手をとる掌に温情と眞実を伝う

心は奉仕に炎え、また力は行動に満つ

笑いに正直の響きあり、仕事に正直の歓びあり

後に来る者に豊かな大地を残す

これぞすべてロータリーの望むところ

人に奉仕すべき真摯な一念

自己のため求めることを差し控え

他人のために求めることにはげむ

自己の言動にやさしく、筆をとりて温かく

正しき道をふみはすこと少なく

奉仕を求めて財力を求めず

隣人といさかうことなく、友人を裏切らず

これぞすべてロータリーの世界

ロータリーの望むところもここにあり
他者への道を円滑にし、

人生の価値を最高に高らしめ

「同胞よ」なる言葉に真実味がこもり
賞讃の言葉を発すべきときは

真摯な努力をほめたたえ

友の姿が立去るまで温かき言葉をやめず

これぞロータリー精神

これぞロータリーの夢

神よ、願わくは、

この世を去るそのときの到るまでに

わが心

神の御心に近づかむことを

デトロイトRC会員

エドガー・A・ゲスト作

小堀憲助訳

風流を楽しむ花の園ならで、後の畠前の田に孜々として鍬を探りて耕し、祖先の祿ひし命の親に懇をつくし、吉野の桜、更級の月より吾が業こそ楽しけれ。朝夕心を留めて、打向ふ菜種の花、井出の山、富貴より好ましく、麦の穂色は牡丹芍薬より腹こたへあるかと覚ゆ。牽牛花より夕顔こそよけれ。萩菊より芋牛房が味ひあり、渾て花紅葉より、栗柿梨は宝の植木なり。稻の穂並の敷藁の前より、腹満つる心地して、栗穂に馴野辺の虫の音を聞くが面白く、遠き名所旧跡より、近き田圃の見廻りに飽きず、松島塩竈の美景より、飯釜の下が肝要なり。工作の銘剣より、鍬鎌蓑笠が調法なり。書画の懸ものより、かけてみる作物の肥えしを油断せず、投げ入れ立花の工みより、茄子大角豆の正風があじわいあり。処として茶の湯蹴鞠のあそびより、渋茶を喫して暮らしうること樂しけれ。玉の台より茅葺きの家に居るが心易し。高根に居らねば、落る氣危なし、実業を尽さば仁者に倣ふて、山地に木を植え、

智者的心を汲み、田の水加減を専らにし、珍肴鮮肉の料理より、銭いらざの雑飯があと腹を病める氣遣なし。總て世の中は飛鳥川の流れ、昨日の渕は今日の瀬となるがごとく、唐土の咸陽宮萬里の長城も終に亡び、平相国の驕も一世、鎌倉將軍も三代、北条、足利の武威尽き、織田豊臣の栄も一代、時過ぎ世変われば誠に夢のごとく。世に稀なる珍味も舌のうちのみ伽羅蘭麝(きやらんじ)の薰も嗅くうちのみ、樂しみては苦しみの基、遊興は暫時の夢化、富めるも羨まず、身の貧しきも嘆かず、口慎むべきは貪欲、恐るべきは奢なり。抑田地は万物の根元、國家の至台なれば、父母のごとく敬ひ、主君の如く尊び、妻子のごとく育ひ、寸地をも捨てず、何れの処にても拓き、鍬先の天下泰平の五穀成就を願ふ外更になし。

有難や雨の降る日の蓑と笠

錦にまさることとなわすれそ

錄一茶翁勸農之詞

豊斎書

(句読点とルビは訳者)

参考文献

- ・ロー・タリーのしおり
- ・ロー・タリーの窓
- ・ロー・タリーの概念と名論・他

一七九〇地区職業奉仕研修会記録集

• Golden Strand

Oren Arnold・田中 毅訳

• ヴェバー 中央公論

尾高 邦雄編

• 経営史学 東大出版会 vol・25 NO4

京都産業大学教授 渡辺 喜七

• 日本を創った12人（後編）PHP新書

堺屋 太一

• 脚下照顧

佐藤 千壽

• 武士道 岩波文庫

新渡戸稻造

• 武士道 講談社バイリンガルブックス版

• ロー・タリー通解

ガイ・ガンデス著 小堀 憲助訳

市原ロー・タリー・クラブ 齋藤 博

高木 勝衛

・近世日本の批判的精神 中村元選集

別巻七 春秋社

別巻七 春秋社

・西村茂樹 吉川弘文館

高橋 昌郎

・日本主義の精神 文芸春秋

山本 七平

・マックス・ウェバー入門 岩波新書

山之内 靖

・弘道 日本弘道会

・弘道 (一〇一三号)

お茶の水女子大 名誉教授

尾田 幸雄

・鈴木正三・現代に生きる勤勉と禁欲の精神 東洋経済新報社

神谷 満雄

・月刊 感生 (エネルギー) No.43

・日本道徳論 岩波文庫

西村 茂樹

・世界がわかる宗教社会学入門 筑摩書房

橋爪大三郎

あとがき

書き終えて不学を恥じるばかりです。この小冊子はあくまでもロータリーの入口を解説したに過ぎません。本論は、クラブ発行の齊藤パスト・ガバナー著「ロータリーのしおり」をこの機会にぜひお目通しをいただければ幸いです。なお、貴重な成果を引用し、参考にさせていただいた諸先輩に厚く謝意を表します。

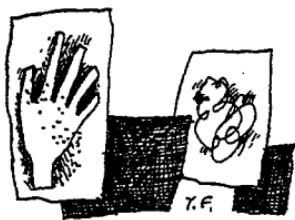
発刊にあたって、小池会長に序を、齊藤パスト・ガバナーには陰に陽にご指導を、時田計代幹事には校正のお手伝いをいただきました。心よりお礼を申し上げます。入会以来、昵懇にしていただいた亡き周郷元会長との約束をささやかではありますが果たさせていただきました。

なお、カットは筆者が長年にわたって親しくさせていただいている深沢幸雄画伯にご協力をいただきました。

ご承知と思いますが、画伯は銅版画（エッチング）の日本における第一人者であるばかりではなく、その作品は東京国立近代美術館はじめ、ニューヨーク近代美術館、イタリアの美術館等、国内外四十余美術館に収藏され世界的に著名です。

一方、多摩美術大学教授、日本版画協会理事長等の要職を歴任された日本美術会のリーダーであります。多忙の中、お引き受けいただき、友情に心より感謝申し上げます。

平成十三年一月



改訂再版に当たつて加藤庄司会長に序を、齊藤博、渡邊隆両・パスト・ガバナーと元分区代理で当クラブの白鳥政孝会員に多大なご助言を、初版に続いて小池清二元会長、時田計代元幹事には大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。
なお、ロータリーの大先輩で、当クラブ会員・元分区代理の三陽工業㈱ 佐藤勇会長に多大なご配慮をいただきました。感謝をこめてここに記させていただきます。

平成十五年七月

常 泉 健 一

Rotary

Q & A

2001年1月1日 発 行

2003年7月1日 改訂再版

編 著 常 泉 健 一

印 刷 三陽工業株式会社

千葉県市原市五井5510-1

T E L 0436-22-4348

カット 深 沢 幸 雄

